
黄昏の旋律

長月 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の旋律

【Nコード】

N4867T

【作者名】

長月 蒼

【あらすじ】

ここは魔導世界イルクリフ。各地にひしめくランカーたちは日々腕を磨く…。そんな中、雨宮葉琉は最強の称号なんてどうでもいい！？

とまあこんな感じです

一話

1000年前『魔法』が生まれた。

『魔法』は提唱された時『火』『水』『風』『雷』『土』の五大元素と。

それに『光』『闇』の属性を加え7種の属性がある時は経ち、100年前のこと、世界中を巻き込んだ戦争があった、『世界魔法大戦』とか言うやつである。

つか、ありきたりで中二臭えネーミング。

まあこう言う言葉のほうが定着しやすいのだろう。

この世界、イルクリフは魔法が日常生活の基礎となっていていろいろなものに活用されている。

また世界ランクと言うものが存在し、G-5からC-1ランク、B、BB、A、AA、AAA、S、SS、ランクそして神の領域GODランク、といった全13階級がある

神の階級の席は一つだけその席を目指してランカーたちは腕を磨く…。

悠光初中高等連合学園…

一般教育、および魔術教育を初等連5年、中等連5年で、計10年間基本、魔法を使うにあたっての基礎およびルールを学習し反復する。

高等連は学習する業務は無くなるが、代わりにランクに登録することが業務になっている。

この世界ではランクによって多少待遇が良くなったりするのだ（だいたい差と言ってもほんのわずかだけ）
それでも人の欲は尽きないものだ。

クラス決めがあつた一応？・・？に決まる。もともとこの悠光の生徒ではないオレ、『雨宮^{あみや} 葉琉^{はる}』

「自己紹介からと言いたいが、この中で唯一高等から入った雨宮、前に来い」

筋骨隆々でいかつい浅黒い肌で短髪の先生。

『朱堂貴章^{しゅどう たかあき}』ランクはB B、が体格通りの野太い声で呼びつける。
ちなみに担任。

髪は黒く高校生らしくワックスを使っているのか、ただのくせつ毛なのか、少し外にはねている。身長は180あるか無いかくらい。顔は全体的に整っている。それゆえに優しそうな印象を受ける。

「ハイハイ。高等から入った雨宮です。よろしく願いします。」
このあいさつで優しそうな2枚目から2・5枚目に変わった。
もちろんあいさつなんて社交辞令である。

正直、先生含め敵では無いのだ。なぜなら……

高等連に入学してちょうど一週間。

「今日から模擬戦が始まるがみんな怪我をしないように気をつけるように以上。」

担任が模擬戦闘における初注意を話した。

乗り気じゃない。

自分の意志とは関係なく名前が読み上げ…上げら…あれ？ああなんだくじ引きで決めんのか。

今度こそ名前が読み上げられた。

「一人目、雨宮 葉琉」

つていきなりかよっ！

「二人目、水連寺 優妃」二人目の名前が呼ばれた瞬間、周囲がざわつく

オレを見る目が好奇から可愛そうな物を見る目に変わったのがわかった。

「えっ、オレそんなピンチなの！？」

二話

担任の朱堂先生が笑いながら

「雨宮、水連寺はな学年トップクラスの魔導師だ。まあ頑張ってくれ」

いらない忠告ありがとうございます（泣）

オレは力なく

「へーい」と返事をした。

そんな姿のオレを見てクスクスと笑っていた。

「いいかこの中、つまり闘技場から出たら場外負けとする。また闘技場外へ魔法は出ないから心おきなく戦うように。模擬戦闘始めえ！」

「ウインドアロー！」

オレに向かってまつすぐ風の矢が飛んで来る

「うおっと！アブねえ！無詠唱かよ。」

よけた矢は闘技場から出た瞬間ボシュツと音を立てて消えた。こういうことか。

感心してると

「ウインドブラスト！」

強烈な風の塊が飛んで来る。

「アイスウォール」

自分の目の前に氷の壁は作る

「フレイムトルネード！」

風の攻撃の刹那氷の壁は火の槍に突破され、オレは場外まで吹っ飛んでいった。

「これまで！勝者、水連寺。お互いに…お…おい、雨宮、大丈夫か？」

観衆が葉琉の周りとりまく。

「先生！雨宮君、気絶してまーす。」

「なにい？本当かあ？……こりゃあ脳震盪だな。誰か医務室まで。水連寺、連れていってくれ。」「は、はい！」

- 水連寺 side -

風魔法で自走担架を形成しその上に自分が吹っ飛ばした相手、『雨宮 葉琉』が乗っている。

「自分ではこんなふうにするつもりはなかったんだけどなあ。」と試合を振り返りそうこうしていると医務室についた。

「失礼します。」と医務教員、『相沢 静香^{あいさわ しずか}』。ランクはB、回復補助魔法に関してはAランク以上の実力を持つ。が珍しそうに出迎えた。

「あなたがここ来るなんて意外ね、で、どうしたの？」

「あゝ模擬戦闘の授業でちょっとやりすぎちゃってちょっといい具合に吹っ飛ばしちゃいました。」

『エリート組で入った娘か…』

静香は苦笑しながら

「とんだおてんば娘ちゃんだった訳ね」

それ聞いて優妃もおもわず苦笑いをした。

おもむろに葉琉の方に近ずき

「どれどれ」

と葉琉の頭に手をかざす。

「……………！！この子」

真剣な目になり、やった本人つまり優妃自身も力が入る。

「結構イケメンねえ」

つられて優妃も葉琉の顔を見る。そりゃあ私だって女子高生ですものイケメンだったら見たいし…

「って、先生！ちゃんと見てください！」

「あら、ごめんなさい」

今度こそしっかり手をかざす。

「バイタルスキャニング」

手を頭、胴体、脚へと移動させていく。

「この子…」

今度こそ真剣に診断しているのだろう。

「この子……寝てるわよ。」

「あ…寝てるって…えー!!」

風のベッドから頭をかきあくびをしながら

「うるせえ…でけえ声たてんなよ。」

「えっ…あ…ごめんなさい……じゃなくて、あんた気失ってたんじゃないの!？」

「あ……ついさっきまで。」

めんどくさそうに答える。

「いつ起きたの」

「おまえがぶつぶつ言ってること」

「最初から!?!？」

「なんで起きたこと言わないのよ!」

葉琉はバツが悪そうに

「なんでって、そりゃあ寝心地が良かったんで」

とちょうどそこへ朱堂先生が入って来る。どうやら授業が終わったらしい。時計を見て見ると授業は、とっくに終わっていた。

「頭の具合はどうだ。まだ痛むか？」

「ええ…まあとりあえず大丈夫です。」

「そうか…そりゃ良かった。授業には出られるか？」

「はい。問題有りません。」

「そうかあとは座学だけだったな帰りに念のためここ寄ってから寮に戻れ」

「はい」

- 葉琉 side -

座学が始まるまであと15分……

それにしてもこの学校とんでもなく広い
学園内に電車が走っているくらいだからかなりの広さなのだろう。

「これ急がないとヤバいんじゃない？」

一人廊下で肩を落とした。

- 水連寺 side -

わたしも急がなきゃ。自分の教室には「テレポート」の魔法をして
おいた

「テレポート」瞬間移動の魔法、自分が一度いった場所を瞬時に移動する、

いくら瞬間移動があるとはいえこの魔法は魔力の消費が結構多いのだ。

まだまだ自分の魔力は満タンに近いから支障は無い。

とまあいろいろ考えながら。廊下に出るが

突然大きな手に肩を掴まれ反射的に銃を構える。

「落ち着け。」

「なんだ、朱堂先生。びつくりしました。」

「悪かったな。ところでおまえも授業が終わったら兩宮と共に来い。」

優妃は訳がわからないまま、

「は…はあ」

返事をした。

三話

返事をした。

昼休み…学生にとってある意味、至福の時、あるものは食事に、またあるものは机に突っ伏し、

葉琉は後者方なのだが、質問責めにあっていた

？クラスには慣れた？

A「割と慣れたよ。」

？中等連にはどこの学校にいたの？

A「この学校とは関連して無い外国の学校だよ。」

？彼女いる？↑それ聞くのかよ

A「いないかな」

この答えで女子と一部の。子↑（ちょっと待て）が盛り上がった。
？この学校どう入ったの？

A「魔力テスト、好成绩で魔力の値が高かったんだ。」

？ちなみにどれくらい？

A「ざつと60万くらい」

「あ、結構高いね」

だいたい学年の平均魔力が55万くらいだそうだ。

「あ、ちなみにわたし、柳やなぎ 早苗さなえさなえでよろしく！」

元気で明るい子だなあ。（悪く言えば、テンション高くてやかましい）

「オレは、鷹崎たかさき 清弥しんや得意武器はコレだ。」

すると清弥は革製のグローブをはめている手を見せた。

「素手？」

「ちげえよ！オレの武器はグローブだ！」

「変わんねーじゃん」

清弥はなんとなく肩を落としぶつぶつ言っている。
そこへ今度は早苗が首を突っ込んで来る。

「あたしの武器はねえーライフルとお人形だよ。」
ドール

「あ、もしかしてドールマスター？」

「ドールマスター」人形使い、人形魔力を蓄積または、注ぎ込んで自由自在に動かし闘う人の銘柄。

「うん、そうだよ！」

清弥は…グローブだと拳闘士だろう。

「拳闘士」拳に魔力を纏わせて闘う人の銘柄。

「まあ次の模擬戦闘でオレの実力を見せてやんよ。」

「ところで二人は中いいの？」

清弥と早苗はお互いの顔を見合わす

「「なに言ってるのよ！」だよ！」

「オレ達4人はパーティーなんだよ！」

二人は話を聞いてなかったのか？と呆れていた。

「4人ってオレと清弥と早苗と後誰？」

「誰って今日、模擬戦でのされたろ。」

思い出したように納得した。

「あゝ…あの水連寺優妃だったけ。」

「そうだよ。優妃ちゃんといっしょのパーティーだよ。」

早苗が付け加える。

こんなやり取りが今週ずっと続いた。
座学も終わり帰るだけとなった。

「医務室に顔出さない」と

そこに待っていたのは朱堂先生と水連寺だった。待ちかねたように朱堂先生の野太い声が医務室に響いた。

「遅かったじゃないか。どうしたなんかあったか？」

「いえ、なにもありません。」

「まあいいちよつとそこ座れ。」

言われ通りに座った。

「お前は今日の模擬戦はどうだった？」

「強かったですね。一発一発が重くて避けんのしんどかったです。ハキハキと葉琉は答える。

「そうか。いい勉強になったか？」

「まあ…そうですね。」

朱堂先生は立ち上がった。

「もう少ししたら、医務の先生がいらつしゃる。」

そう言つて朱堂先生は部屋を出ていった。

短い沈黙。

「ねえ…」

沈黙を破ったのは水連寺だった。

「わたしの攻撃どうやって避けたの？」

「どうやってってスピード中心に身体能力の強化を」

「ふーん」

再び沈黙。

「わたしの攻撃をしっかりと避けたのはあんたが初めて…」

「そうか」

三度の沈黙。

と、そこへ相沢先生がやって来た。

「あら、雨宮くん。頭の具合は大丈夫？」

「大丈夫です。」

相沢先生は頭は撫でてきた。

「大丈夫なら問題無いわね。帰っていいわよ。」
葉琉と優妃は二人揃って医務室を後にした。

四話

- 葉琉 side -

寮に着き、一息つく。

『今日の模擬はめんどかったな…』

とか考えていると、ケータイにメールが届く。

メールの主は清弥だった。

『暇つぶしにおまえんとこ行くぞ（笑）』

読み終わると同時にドアがノックされる。

「もう来たのかしん…や？」

そこにいたのは清弥ではなく、黒髪を肩口で切りそろえ、濃紺のブレザー、同じく紺のスカートの少女が立っていた。優妃である。

「こんばんは。」

「何の用だ？」

葉琉は素直に疑問符をうつ。

「ここでは何だから、外へ」

「？…あ…ああ」

『清弥今日は無理だ…』

- 水連寺 side -

今日の模擬戦の違和感…雨宮葉琉との対戦…

確かにふっ飛ばした。ふっ飛ばしたが手応えがない。

「もう一度…問いただしてみよう。」

そう思うや否や部屋を出て、雨宮の部屋へと向かう。

ドアをノックする。程なくしてドアが開く…

「もう来たのかしん…や？」

「こんばんは、ここでは何だから外へ行きましょう。」

言われた通り外へ出て、優妃について行き
鍛錬場の草原グランドへ着いた。

ちなみに草原の他、湖、砂漠、大闘技場などがある

「で、何の用だ？」

ただ呼び出したわけではないだろう。

「もう一度、わたしと戦って、」

「はあ？」

葉琉は訳が分からないといった表情をした。

「だから、わたしともう一度戦って。」

「なぜ？」

間髪入れず言い放った。一瞬の沈黙。

「…あなた…今日の模擬戦…手抜いたでしょ。」この言葉に葉琉は
口を噤んでしまった。

沈黙は時に肯定へ変わる。

「やっぱり。」

葉琉はため息をついて諦めた。

「…よく気づいたな…」

葉琉の表情がほんの僅か険しくなる。

「あなたへ最後の攻撃今までで一番手応えなかったから」

「…そうか、ならオレとやってみるか？」

「だから、そう言ってるでしょ。」

おもむろにブレザーの内ポケットから円盤を取り出して地面に置いた。

この円盤は半径50Mに闘技場と同じシールドを張り、シールド外

へ魔法が出ないようにするためのもの。

「さあ、始めましょう。」

「ちよつと待て、」

葉琉は銃を構えた優妃を制した

「なに？」

「ちよつとしたテストだ。オレが力を出すか否かのな。」

「何する気？」

「こういうことさ」

葉琉は優妃に闘気を叩きつけた。

「これがテストなの？」

あたかも優妃は平気な様子だった。

『まだ軽いさ…』と葉琉は心の中で思う。

「これがオレの言うテストさ。」

一気に闘気を叩きつけた。と同時に優妃が膝を折った。

「ハア…ハア…これがあなたの本気…」

優妃は肩で息をする

「大丈夫か？」

「ええ。」

その言葉とはうらはらに額には玉の汗が浮かんでいた。

「これでわたしの感じた違和感が解消されたわ。」

優妃の額には、汗はまだ浮かんでいたが当の本人はスッキリした表情だったからこれで良かったのだろう。

葉琉は一人その場を後にしようとした。

「ちよつと待って！」

優妃が呼び止める。

「なんであんなまねしたの？」

「さあ？なんでかねえ」

葉琉はその場を後にした。

五話

ここなら誰も見てないだろう。

草原グランドの端へきた。

小型マジックフィールド（以後S M F）を展開する。

葉琉は手を前にかざした。

一振りの剣が現れる。

と同時にS M Fの機能の一つトレーニング機能を使って魔力体X100を召喚した。

「さて…久しぶりに身体でも動かしますか。」

葉琉は剣を軽く握る。

剣の重みが伝わる。

これは鍛錬用の剣だが葉琉の魔力により折れない程度に強化している。

トレーニングのスタートのスイッチを押すとき、タイマーが目に入った。格ゲーみたいだった。

「絶つつつ対、学園長の趣味だな…。」

まあ時間制限って言うのもおもしろそうだ。

タイマーを90秒にしてスタートさせる。

「やりますか、ファーストギア…残影」

葉琉固有の技

「残影」自分の四肢に魔力を纏わせスピード、手数のみ長い間上昇させる。

優妃の攻撃をよけたのはこの技を使ったからである。

軽く息を吐いた。

「はああああ」

魔力体の中へ葉琉は突っ込んでいった。
刹那、魔力体が天高く吹っ飛んで行く。

スピードのみと言っても葉琉が振る剣の一撃は、
そこそこ重く魔力体でいどなら吹っ飛ばすのは容易だった。

『ピーーーーー』

タイマーの音が鳴ると同時に最後一体を切り裂いた。

「ふゝ身体もあつたまつて来たし、もう一度やって帰って寝よ。」

もう一度タイマーをセットさせスタートする。

「さて…何秒で終わるかな…」葉琉は剣を構え刀身を撫でた。

すると葉琉が撫でた所から、白く光り始め、それは、葉琉の手も同じだった。

「天衝牙」

「天衝牙」

葉琉固有の技

刀身に魔力を纏わせ、広い範囲に斬撃を飛ばす。そのとき威力が分散し威力が低下しないように

エネルギー球を飛ばした斬撃に当てて低下を防ぐ。

天衝牙の斬撃の軌跡は波紋のように広がり、瞬く間に魔力体X100を消滅していく。

「終わったか？あゝ帰って寝よ。」

終了時間13秒

五話（後書き）

ブログみたいなものが終わりました。

こんな駄作を読んで下さった読者に感謝します。

次は試験編です。

こんな感じで細かく一編一編出していく予定です。これからもよろしく！

長月 蒼でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4867t/>

黄昏の旋律

2011年10月8日12時20分発行